

具体的な行動指針 (13:1~25)

■はじめに

1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

2. 手紙の内容と13章

(1) 手紙の前半は、教理である。

- ① ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。
- ② 神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。

(2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。

- ① 11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。彼らの手本を一言で言えば、苦難の中での忍耐である。
- ② 12章では、旧約の先輩たちを手本として、またイエスの苦しみを胸にきざんで、「信仰の忍耐」を発揮するよう勧められる。
 - 前半(1~11節)では、信者を忍耐へ導き励ます二つのこと、忍耐の限度、そして苦難の目的について語られる。
 - 後半(12~29節)では、苦難に比較的強い信者は弱い信者を助ける義務があること、また信者は、すべての人との平和を追い求める義務があること、また、地位的聖化を通して実際の聖化を受け取っていくべきことが教えられる。

(3) 13章では、これまで語られてきたことを踏まえて、具体的な行動指針が語られる。

- ① くれぐれも、この部分だけを取り出して外面的な行いだけを立派にしてはならない。
 - まず教理を学び、そして信仰の先輩たちの手本を置く。
 - 自分が走るべきコースから外れず、ゴールから目を離さない。
 - 何のために信仰の忍耐を発揮するのか、その目的【聖化】を理解する。
- ② そのうえで、具体的に何をすべきか、何をしてはならないか、という行動指針

3. 本日のアウトライン

- (1) 人間関係における行動指針 (1~6 節)
 - ① 何を愛すべきか 三つ
 - ② 何を愛してはいけないか 二つ
- (2) 信仰生活における行動指針 (7~17 節)
 - ① 最初の指導者たちを覚える
 - ② メシアに仕える
 - ③ 現在の指導者たちに従う
- (3) この手紙が宛てられたユダヤ人信者たちが行うべきこと (18~25 節)

□人間関係における行動指針 (1~6 節)

1. 何を愛すべきか 三つのこと 兄弟愛・旅人への愛・囚人への愛

(1) 1 節「兄弟愛をいつも持っていなさい」

- ① 「兄弟愛」とは、イエスを主と信じる者たちの中での愛である。
 - ヨハネ 13:34 「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」
 - マタイ 22:36~40 モーセの律法の中で、大切な戒めは、どれですか？
→ 「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」(申命記 6:7)。これが大切な戒めの第一です。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(レビ 19:18) という第二の戒めも、それと同じように大切です。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。
 - 新しい戒め:「新しい」部分は、互いに愛し合うことではなく、愛し合う基準である。「あなた自身のように」ではなく、「イエスが信者を愛したように」である。
 - 「あなた自身のように」とは、自分自身を愛する個人的な愛である。
 - それに対して、イエスは、私たちが完全にそして無条件に愛して下さった。私たちのために死んでくださったほどの愛である。
 - 世の人々が私たちを見て、イエスの弟子だと知るのとは、私たちがイエスと同じような無条件の愛をもって兄弟姉妹を愛するときである(ヨハネ 13:35)。
- ② 「いつも持っていなさい」とは、「続けなさい」という意味。兄弟愛を壊そうとする働きかけがあるから。
 - パウロですら、「にせ兄弟の難」(Ⅱコリ 11:26) に遭った。
 - サタンは、地域教会の中に、偽の信者たち(マタ 13:38~39)、あるいは

偽教師たち=似てはいるが別物のイエスを宣べ伝える（Ⅱコリ 11:13~15、Ⅱペテ 2:1~19）を潜入させてくる。

- 聖霊の賜物のひとつに、「霊を見分ける力」（Ⅰコリ 12:10）
- 偽の信者たちや偽教師たちを排除・裁くことは、神のなさること。すべての信者がなすべきことは？ → ユダ 20~21 節

- ③ 迫害もまた、聖徒たちを攻撃するサタンの働きである（黙 2:10）。
- ④ 信仰生活には、迫害、苦難、試練、訓練が伴う。苦痛に耐える力において、比較的強い信者は、弱い信者を助け、励ます義務がある（12:12~13）。ただし、その義務を遂行するとき、その出発点は義務感ではなく、兄弟愛である。

(2) 2 節 「旅人をもてなすこと（=旅人への愛）を忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。」

- ① ここでは、ユダヤ人の旅行者に限定されていない。異邦人の旅人に対して愛を示すことは、当時の反ローマ、異邦人排斥の機運とは逆行する、勇気ある態度である。
- ② 旅人がユダヤ人である場合、迫害弾圧によって住む家を失ったユダヤ人信者。彼らを自分の家に迎えてもてなすことは、自らも迫害弾圧を受ける恐れがある。それを恐れず、兄弟姉妹を助ける愛である。
- ③ 「ある人々」・・・その実例は、創 18:1~19:1。アブラハムが迎えた3人の旅人は、主（第二格の子なる神、19:24）と二人の天使であった。
- ④ 見ず知らずの旅人は、神の祝福を携えて来た天使かもしれない。迫害弾圧の嵐が吹く中でも、父なる神がすべてのことを支配しておられること、信者には良きことをしてくださる良き父であることを信じるのが、信仰である。

(3) 3 節 「牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい」

- ① 「牢につながれている人々」とは、信仰のゆえに投獄されている兄弟姉妹である。
- ② 「思いやる」とは、同じ思いになって、彼らのために祈り、彼らを見舞って差し入れなどをすることである。これもまた兄弟愛から発する行為である。
- ③ その理由は、「自分も同じ肉体を持っているのですから」→直訳「自分も同じからだの中にあるのですから」=信者はキリストを頭とするひとつの体に属する。ひとりの苦しみは全員の苦しみである。
- ④ 投獄されている信者への差し入れは、自らを仲間であると示すことであり、自分も迫害弾圧を受ける恐れがある。それを恐れず、兄弟姉妹を助ける愛である。

6 節 「主は私の助け手です。私は恐れませんが、人間が、私に対して何ができましよう。」
 (旧約聖書 詩篇 118:6 の引用)

2. 何を愛してはいけないか 二つのこと 性的不品行・金銭
- (1) 4節 「寝床を汚してはいけません」・・・「寝床」**ギリ**コイテ → **英**coitus 「性交」
「神は、・・・さばかれるからです」→ここでの強調点が性的問題であることを明らかにしている。信者が性的不品行を犯したら救いを失うということでは、ない。
- (2) 5節 「金銭を愛する生活をしてはいけません」
- ① 今、持っているもので満足すること
 - ② 必要なものは与えられると確信すること
 - 主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」(旧約聖書 申命記 31:6、ヨシュア 1:5 の引用)
- (3) この教えの現代的意義
- ① 「この世【コスモス】の流れ【アイオン】」(エペソ 2:2)
 - 「流れ」アイオン・・・コスモス(この世)の中にサタンが仕込む各時代の精神、あるいは価値観
 - 哲学、宗教、イデオロギー、個人主義、経済第一など、それぞれの時代の価値観を反映する「時代精神」が、アイオンである。
 - ② 現代の時代精神は、性的不品行と金銭を公然と愛するアイオンである。

□信仰生活における行動指針 (7~17節)

1. 最初の指導者たちを覚える (7節)
- (1) 「神のみことばをあなたがたに話した指導者たち」、「彼らの生活の結末」・・・彼らは、第一世代の指導者たちである。すでに亡くなっている。
 - (2) 「その信仰にならないさい」・・・彼らは走るべき行程を完走し、信仰の忍耐を示した。彼らの信仰を手本とせよ。
2. メシアに仕える (8~16節)
- (1) 8節 「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」・・・メシアは、信者たちが苦難を通るときに、必ず勝利を与えることができる。きのう=11章の旧約の信仰者たちに信仰の勝利を与えた。きょう=7節の最近の指導者たちにも勝利を与えた。そして、いつまでも=未来において、この手紙の読者である信者たちにも勝利を与えるであろう。
 - (2) 9節 不変のイエスに対して、人間の教えが対比される。「さまざまな、異なった教え」
 - ① 「さまざまな教え」・・・人間の教えは、10人の論者がいれば、10の教えがあるように、ばらばらである。一人の論者にしても、時期や状況によって主張が変わる。しかし、聖書は紀元前1500年頃のモーセ五書から紀元1世紀末の黙示録まで旧約39巻、新約27巻、合計66巻の書物が集められたものでありな

がら、メシアをキーワードにして読み解くなら、体系的で整合性のある教えが展開されている。

- ② 「異なった教え」・・・聖書に記された内容から離れた教え
- ③ 心を強めるのは、食物によるのではなく、恵みによる。
- 心を強めるとは、霊的成長のこと
 - 食物とは、モーセの律法によって祭壇に血を捧げられた動物の肉を指す。これは、レビ系祭司職に与えられ、彼らの食物となり、経済的にレビ系祭司職制度を支えた。
- (3) 10 節 「私たちには、ひとつの祭壇があります」・・・「ひとつの祭壇」とは、メシアを指す。「幕屋で仕える者」＝神殿祭儀に戻って動物の犠牲をささげる者は、メシアの祭壇にあずかってメシアの恵みをいただくことはできない。
- (4) 11 節 「動物の血は、罪のために供え物として、大祭司によって聖所の中まで持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるからです」・・・モーセの律法では、幕屋で仕える大祭司でも食することができない犠牲がある。それは年1回、贖罪の日の犠牲である。
- (5) 12 節 「ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました」・・・イエスの十字架刑は、エルサレムの城壁の外、門の外で執行された。現在は、城壁の位置が変わって、エルサレムの市内に位置する。
- (6) 13~16 節 信者はどのようにしてメシアに仕えるのか
- ① 13 節 「キリストのはずかしめを身に負って」
- 世の人たちは、罪を認めず、悔い改めを馬鹿にする。イエスの復活を信じるなど正気のさたではないと言う。時代を問わず、真の福音伝道は、嘲笑の的である。さらに、迫害者は、信者を嘲るだけでなく、辱しめ、苦しめ、命まで奪おうとする。
 - これらすべてを、イエスは経験された。
 - 使徒たちも世から憎まれ、迫害された。
 - 予告 (ヨハネ 15:18~21)
 - 「使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出ていった」(使徒 5:41)
- ② 13 節 「宿営の外に出て」・・・宿営とは、この文脈では、ユダヤ人社会、神殿祭儀を中心としたユダヤ教のシステムで構成される社会である。
- ③ 14 節 「私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。」
- この手紙が書かれたとき、地上にあったエルサレムは永遠の都ではない。やがて、紀元 70 年、ローマ軍によって陥落する都である。

- 後に来ようとしている都とは、12:22「天のエルサレム」である。今は天にあるが、後に、新しい天と地が造られたとき、地上に来る（黙 21:2、10）。

④ 15~16節 「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち、御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです」

- メシアは大祭司、信者は祭司（Iペテロ2:5）である。
- 信者が祭司として神の前に捧げるものは、
 - 賛美と感謝
 - 善を行うこと（とくに、「持ち物を人に分ける」＝迫害で経済的に困窮している人に持ち物を分け与えること）
- 救いを受けるために善を行うのではない。行いによらず信仰によって救われた者が、神へ捧げるささげ物である。救いを受けたことへの感謝、神の愛への応答である。

3. 現在の指導者たちに従う（17節）

- (1) 指導者たちの役割・・・信者たちのために神の前で弁明する。信者たちのたましいのために見張りをする。
- (2) 信者たちの義務・・・指導者たちが喜んでその役割を果たすことができるようにする。嘆いてすることのないように。そうでないと、信者たちの益にならない。
 - 「益になる」＝霊的成長につながる（ロマ8:28、Iコリ12:7）

□この手紙が宛てられたユダヤ人信者たちが行うべきこと（18~25節）

1. 著者および彼の同労者たちのために、彼らが祈るべきこと（18~23節）
2. 彼らが現在の指導者たちに挨拶すべきこと（24~25節）